

「いじめ」の論法

—素人理論依存型「いじめ」論から虚構暴露型構築主義をへて生態学的布置モデルへ—

内藤朝雄（東京大学）

「いじめ」をめぐる、ジャーナリズム、アカデミズム、市井などで、様々な論議がなされてきた。今回はもっぱらアカデミズムセクターでの「いじめ」の論じ方について検討し、それをたたき台にして乗り越えるかたちで、われわれ独自の論じ方を提示する。

1・素人理論依存型「いじめ」論

アカデミックセクターで何か新しいことが論じられる際、最初から学問的に完成度の高い議論が展開されるわけではない。むしろ、素人理論に各ディシプリンの慣習的方法を接合することから始まる。最初の段階では木に竹を接いだようなものが多い。たとえば、「いじめ」についての質問紙調査から統計を出し、それについて検討する論議が素人理論そのものである、といったものである。あるいは統計や社会学的分析と、道徳的衰退に対する感嘆調の素人理論とが、モザイク状に混在しているものもある。このモザイク状の混在自体は、アカデミックセクターが十分なニッチと淘汰圧とを備えていれば、改善されていく。つまり、多くの研究者が議論に参加しつつ、論理的整合性や事実との一致を批判し合い、よりもっともらしい説明を競いあうことによって、「いじめ」論の完成度は高まっていく。たとえばある段階で、「こどもたちの人間関係が希薄になった」とも言えるし、「こどもたちが悪ノリ集団に濃密に埋没し、内輪以外の社会秩序を無視するようになった」とも言えるような現象が観察されたとして、次の段階でこの「希薄」と「濃密」の矛盾を解く説明が提出されたとする。あるタイプの関係様式が「希薄」で、まったく別のタイプの関係様式が「濃密」な

のであり、複数の関係様式の生態学的な配置のあり方こそが問題なのだ、というふうになる。すると、それ以降、「人間関係が希薄になった」といった絆一般の衰退を嘆くタイプの議論も、「集団埋没的」といっただけの議論もしづらくなり、より精緻な議論が学者集団で要求されるようになる。このような正攻法的な発展に従って、アカデミックセクターは素人理論から離脱した体裁を整えていく。

2・虚構暴露型構築主義

「いじめ」論においてはこの正攻法的発展は比較的歩みが遅かった。それは、ジャーナリズムで加熱したわりには、アカデミックセクターでのニッチが小さい、という不均衡のせいかもしれない。そこに搦め手からの批判的言説が加わった。構築主義に依拠する論者たちによる、「いじめ」の問題構築自体の問題化である。社会理論としての構築主義の展開と、日本で構築主義に依拠して「いじめ」を論じた業績群との間には、ズレがある。ここではもっぱら後者を扱う。社会理論としての構築主義自体は、批判的な議論の応酬の過程で理論的立場が多岐にわたり、「構築主義」と十把一絡げにいうことは難しくなっている。

日本で構築主義に依拠して「いじめ」論を論じる業績群には次のような特徴がある。

①虚構暴露→価値下げ傾向：社会問題として「いじめ」が構築されるということを指摘することが、「いじめ」の問題構築自体の価値下げと（暗にあるいは露骨に）連動している。「問題構築現象として説明＝暴露されるものは、たかだかそのようなものに過ぎない」というふうに、価値的に「問題構築」する論法は、「クレタ人は嘘つきだ

とクレタ人が言う」といったパラドックスに陥る。
 (ちなみにスペクターとキツセは、虚構暴露→価値下げどころか、この考え方をさまざまな社会的構築に携わるひとびとが活用することを奨励している)。②その際、さまざまな濃淡で、モラルパニックという問題化が混入していることが多い。現象そのものを価値中立的に表現すれば「急性モラル感度上昇変動」であるが、価値的に悪く言えばモラルパニック、良く言えば「人権感覚の成長」と言うことができる。どちらととらえるかは価値観の問題である。日本の構築主義の論者の分布は、おおむね前者に集中している。われわれは、モラルパニックの適用の有効性を判別する方法を提案する(ハヌマンラングールの判別式)。モラルパニック説は、「もしハヌマンラングールが人間だったら」という思考実験との類推に耐えうるかどうか、というスクリーニングによってその社会的意義をチェックすることができる。③問題が構築されたこと自体を虚構暴露する一方、批判するためには別の問題構築をすべりこませる(虚構暴露のゲリマンダー)。④どういうタイプの問題構築を虚構暴露的に価値下げし、どういうタイプの問題構築をすべり込ませるか、という「貸借表」から一定の傾向が現れた場合、それは公共アリーナの文化的条件を示す指標となる。⑤すべての社会現象は多かれ少なかれ意味的な構築物としても見ることができるのであるから、「これはたかだか構築されたものにすぎない」と言うことには何の意味もない。構築主義的発想は、虚構暴露ではなく、どのような問題構築がどのような社会的条件のもとでどのように組織され、どのような帰結をもたらすか、といった研究になってはじめて、学問的に意味のあるものになる。論者たちが問題構築を虚構暴露的ではない仕方論じる側面を取り上げてみると、「いじめ」という問題構築の社会的影響のうち、もっぱら悪影響の側面が論じられている。しかも、構築主義的ではない社会的影響の実体論的分析と、構築主義的(あるいは唯言説主義的)な言説空間論との接合部分が、論理的整合性の弱点となっていることが多い。

3・I P S 諸秩序の生態学的布置モデル

「人が語るから現象がある」というファンダメンタルな関係主義(あるいは観念論)は、自分が

使う文字に×を書いて黙るか、恣意的な存在のゲリマンダーをするしかない。「人が語るから現象がある」のか「現象があるから人が語る」のかは永遠にわからないが、「現象があるから人が語る」という定点(素朴实在論)を仮構することなしに、明晰にものを語ることは不可能である。この明晰に語るための容易さという点から、科学は確信犯的素朴实在論により、理論モデルを理念的实在と仮にみなして用いる。われわれは確信犯的素朴实在論の立場をとり、理論モデルをつくるという作業に従事している。この理論モデルは、関係主義的な傾向の論者が扱ってきたものを、符合化していくことすらできる。これは①体験構造モデルを、②社会秩序の中での、③コミュニケーション領域で組み立てていく、という作業になるだろう。

構築主義もその一支流である社会学のリアリティ構成論の流れは、比較的ファンダメンタルな関係主義の傾向が強かった。しかし、確信犯的な素朴实在論にもとづく理論モデルで、リアリティ構成論を換骨奪胎できないだろうか。われわれは、体験構造モデル→それに基づくコミュニケーション→コミュニケーションの連鎖集積からなるマイクロ秩序モデル→マイクロ秩序のもとで起こるコミュニケーション→体験構造モデル、という連鎖についての理論モデルを構築し、それをI P Sと呼んだ。体験構造はIntra-personalな心的な系の作動において表現される。その心的な系と、複数の個体の間での秩序だったInter-personalな系との、相互に螺旋状Spiralに誘導し合うシステムがI P S(Inter-Intra-Personal-Spiral-System)である。一定のマクロ的条件のもとで、さまざまなタイプのI P Sが生態学的にせめぎあう形式を検討することで、人々のリアルな体験とマイクロ社会レベル、マクロ社会レベルの接合を図ることができる。これがI P S諸秩序の生態学的布置モデルである。この新たな理論の揺籃段階での典型的な業績例(exemplar)として、「いじめ」研究には学問的に大きな意義がある。